

関係のなかの「古い」

——大都市郊外に生活する高齢男性の事例分析——

宍戸 邦章

SHISHIDO Kuniaki

1 はじめに

高齢者を「受動的・依存的」な客体として暗黙のうちに前提とする社会的な扱いは、近年変更を迫られている。「個としての高齢者」、「能動性」「主体性」といったキーワードをはじめとして、新たな高齢期の側面が強調され、光が当てられようとしている。高齢者研究における社会的ネットワークの考え方も同様に「個としての高齢者が他者との関係を維持し、主体的に交流しているという視点」(安達 1999: 23) が示されている。しかしながら、高齢者研究における既存のネットワーク論的アプローチを参考に調査・研究を進めていくと、筆者は次の2つの点で反省を抱くようになった。

第一に、高齢者研究におけるネットワーク論的アプローチの大半を占める内実は計量的調査手法を用いた「サポート・ネットワーク」研究であったということである。これは「老いと孤独」または、「福祉資源としてのインフォーマル・ネットワーク」という「老人問題史観」(金子 1998: 69) の観点から捉えられた色彩が強く、結局のところ高齢者を受動的・依存的な客体と措定することから成り立っていたという印象を拭えない。この疑問と反省は、高齢者への聞き取り調査をするなかで、研究者が作り上げた研究枠組と経験的対象世界との“そぐわなさ”として筆者には感じられた。現在の高齢者研究においても、高齢者という存在に対する「根本イメージ」(Blumer 1969:

62) といったものは生き続けていると思える。

第二に、既存のネットワーク研究において主な焦点となっていたのは、性別・社会階層・地域類型・世帯構成等を独立変数とする従属変数としてのネットワーク構造(別居子・近隣・友人・親族等の関係量、接触頻度・同質性等)の差異ということであった。ここではネットワークの構造自体の解明が目的とされ、ネットワークの差異が高齢者の生活に対していかなる「意味」を担っているのか、「主観的幸福感」との関連性が問われることがあっても、それ以外の知見はあまり見出すことができていないのではないかと思える。

本稿では、以上の疑問を出発点にして考察を進める。そのために、まず高齢者研究の視点に孕まれる問題と現代の老いのイメージをめぐる分裂した状況を把握する。次に高齢期の社会的諸関係の担う意味のうち、「サポート」という観点では覆いきれない関係の側面を物語論的アプローチの一部を取り入れながら考察する。最後に関西学研都市京都府域に生活する高齢者の事例分析から、サポートという観点も含めて高齢者を取り巻く社会的諸関係の担う意味を対象者の語りの文脈に沿いながら考察する。

2 「老人問題史観」の視点的問題

高齢者の社会的な捉え方には大きく分けて2つのものがある。副田義也はそれを「老人問題論と老年世代論」、上野千鶴子は「老人問題と老後問題」として区別する(副田 1978; 上野 1986)。

金子勇の「老人問題史観」は副田の「老人問題論」、上野の「老人問題」の視点を総括したものとして考えられる。

「老人問題」とは、老人やその家族のかかえる生活問題＝社会問題である。それは社会が老年期に入った人々の生活において予防、解決の必要があるとする社会的事象をさしている。「老人問題」は、高齢者を取り巻く社会（政府・議会・ジャーナリズム・民衆・世論・社会学者等）の側が、特定の価値意識に基づきながら、問題を構成する。（副田 1981： 320）そのためにこの視点は、老人が周縁に位置付けられた国家問題、女性問題、制度的問題である場合が多い。その基幹部分は貧困問題であり、それ以外に、疾病・身体障害・運動機能の低下・老人性痴呆などの問題が含まれる。この老人問題論は生存権思想に根ざした「老齢保障論」に展開する。老人問題論から導き出される論議は、一貫して老人を「社会の客体」とみなす。老人はつねに社会から「働きかけられる存在」である。この視点は、よりよい福祉社会の実現を考察する正の側面（＝建前）の背後に、老人を社会的な三人称の一群として、できることなら社会から排除したい「問題人口（＝客体）」として感受させるという負の側面（＝本音）を常に内包している。「『老人問題』は福祉をどんなに向上させようとも老いという人間の宿命を嫌悪し隠蔽する文化システムを温存させる」（上野 1980）のである。

天野正子は、ある老人の語り——「人間、年をとることは自然なので、それが『老人問題』だと騒がれるのは、よくよく世の中がゆがんでいるからです。多くの年寄りも、老人問題、老人問題と騒がれると、生きていて悪いのか、もうこの辺で死ななくちゃいけないのかと、そういうふうを受け止めますよ」——を引きながら、「老人問題とは、ある時代のある社会が、その社会や文化のし

くみにとって、老人の存在が障害になると判断したときに生まれる」（天野 1999： 173）としている。

金子勇によれば、要介護高齢者は、在宅と病院・老人福祉施設への入院・入所の合計で多く見積もっても 15% であり、残りの 85% は自分の家で元気に最後まで暮せる高齢者であるという事実から、『『老人問題』という言葉には、高齢者のうち 15% に属する他者からの援助を必要とする人しか見えず、主体的な高齢者像としての『人生の達人』がまるで浮かび上がらない』（金子 2001： 66）と批判している。

『高齢者白書 2001 年版』によれば、「全くの寝たきり」状態になる高齢者は、死亡の 6 ヶ月前には 2 割程度しか存在せず、それ以後急激に上昇するという曲線になっている（『高齢者白書』2001： 57）。「老人問題」の代表である「寝たきり」の老人イメージは、この死亡する 6 ヶ月前の期間を老年期の約 20 年間に敷衍するようなものである。ベティ・フリーダンは、「結晶性知能（言語能力）」、「流動性知能（推論・空間認識）」、記憶力、免疫機能などの生物学的な機能の点において、加齢による低下は必ずしも認められないといういくつかの実験結果を挙げている。それが低下して見えた要因として、①コーホート間による教

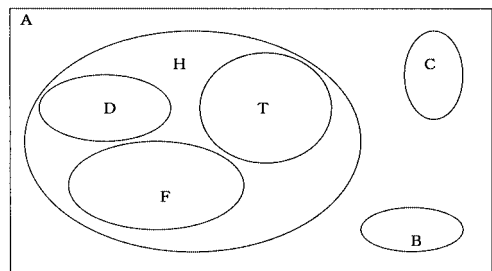


図 1 高齢者集合

A：高齢者 H：在宅健康（D：一人暮らし F：夫婦のみ T：子と同居） C：在宅介護 B：病院施設・入院入所

（金子 2001： 20 より）

育程度、生育環境等の違いを加齢効果として誤って判断していたこと、②被験者である高齢者が病院や介護施設の入所者である場合が多かったこと、③検査内容が若い時期の知能を測定するのに適した問題形式であったこと等を挙げている。フリーデンはこれらの知見から「病理的な側面からしか老いを取り上げず、肯定的な捉え方には徹底して不快感を抱くといった、老年学の専門家たちの変に偏った嗜好」(フリーデン 1995: 14)を指摘している。また『労働白書平成12年版——高齢社会の下での若者と中高年のベストミックス』では、高齢者に対する14要素の職務能力評価について報告している。これは45歳から65歳までの加齢に伴う能力変化のパターンを企業がどのように評価しているのかを調べたものであるが、その結果は様々な職務能力の要素は必ずしも加齢に伴って低下していくものではないというものであった¹⁾。この知見に対し「企業や労働者自身の固定観念、さらには企業の人事管理制度上の問題などが、高齢者の持つこうした『見えない資産』の第一線での活用を妨げている面がある」(労働白書 1999: 211)とこの白書では指摘している。

老人の主体的な生き方を考えていくにあたって、まず最初に障壁となるのは研究者自身も払拭しきれない「固定観念」、否定的なイメージをおびた「老人問題史観」である。この視点からすると、高齢者は「否定的老人イメージ」のフィルターを通して、「問題」の側からしか定義されない。「孤独・貧困・介護・生活サポート等の問題がなければ老人ではない」かのようである。

例えば年金受給額階級別に見ると高齢者の就業割合は大きく異なっている(年金受給額2万円以下では9割の就業率、31万円以上になると3割まで減少)、特に高齢単身女性の経済的貧困の問題がある。そして介護・医療問題も老年期では他

の年齢層と比較して格段に大きい。しかし、貧困問題の一部や介護問題が老年期に偏在するとしても、それは失業者・低賃金労働者・身体障害者に固有の問題であって、高齢者はそれらの単なる混合物としては規定できないだろう。研究対象である「高齢者」とは、いったい何をさしているのか。この老人イメージの構成のされ方を図に示すと図2のようなものとなると考えられる。一般に高齢者は「65歳以上の者」とされているが、実際の研究視点では、高齢者はそれ以上の意味を帯びる。むしろこの歴年齢以上に、それと関連した社会的・身体的年齢によって生じる様々な諸現象の偏在性の中に「老いの本質」を見出している。老人問題の視点は老年期に生じやすい問題を把握し、その社会的な予防・解決を志向するものであるから、加齢に付随して発生する介護問題・貧困問題・孤立問題・定年制の問題等の重なる部分に老性を感じる。これらの円が重層する程、「65歳以上の者」は「老人らしく」あり、円の重なりが少ない程、「65歳以上の者」は「老人らしく」ない。また、老いの本質を円の重層する部分に求めているために、重層しない個所に含まれる老人は、いずれ重層部分へ移行していくものとして、「予備軍」的な扱い方をされることになる。このような「老人問題史観」の視点の強調は、一部の円の重なりがフィットする場合は別にしても、現実の高齢者を捉えるうえで問題が多いだろう。40年前の那須宗一の指摘もこのことを言い表している。

最近の老人世代の人口的增加を疾病や事故や失業と同じ現象とみて、ただ生命の危機から老人世代を保障すべきものと考えている限りでは、おそらく老人世代が社会的に存在する意義は発見されずに終わる(那須 1962: 67)。

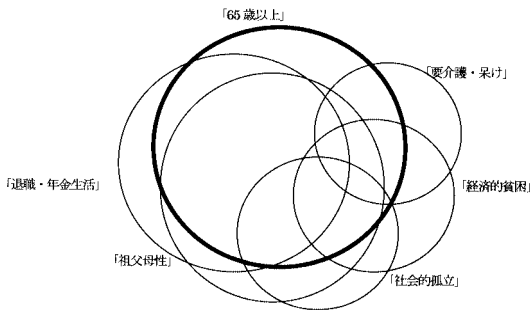


図2 「老人」イメージの構成

では、この「老人問題史観」を疑ったとして、次にどのような観点から現代の高齢者、特に前期高齢者を考えたらいいのだろうか。そこで次に副田の「老年世代論」、そして上野の「老後問題」に注目したい。この2つは非「老人問題史観」ではあるが、ピッタリと対応する概念ではないようである。「老人問題史観」とはどのように異なり、その視点が見つける問題は何なのか、以下に確認していきたい。

3 非「老人問題史観」の視点

まず、副田の「老年世代論」の視点は老人が「社会の主体である可能性」を模索するものである。具体的には老人の労働、学習、レクリエーション、性愛、社会参加を主要なトピックスとする。それは「社会から働きかけられる」受動的な側面ではなく、「社会に対して働きかける」能動的側面についての模索である。一方、上野の「老後問題」とは「老人が『主体』として経験する『古い』の問題を扱う」としている。上野は老いを主体的に経験する場合の困難として「向老期のアイデンティティ危機——自我（自己アイデンティティ）と特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我（社会的アイデンティティ）のズレ」を挙げている。老いという現実「人間的な意味と価値」を模索するものとなっている。

副田と上野の「主体」という使い方は異なっている。副田のそれは「社会に対する能動性」を強調する主体としての側面、上野のそれは「当事者性」を強調する主体としての側面である。「老人問題論」が老年期の生理的・安全的・生存的欲求に対応する問題を外在的な視点から扱うのに対して、「老年世代論・老後問題」では、老年期の文化的・社会的欲求（帰属欲求・尊厳欲求・自己実現欲求）に対応する問題を当事者の視点から扱う。では、この老年世代論・老後問題が文化的・社会的問題としてつきつけている核心はなんなのだろうか。

副田は、老年世代論の困難として「方法としての社会科学と、思想的基盤としての老年観が準備されていない」（副田 1978： 8）と述べる。「社会は社会的分業の体系である」という学問的伝統から見る限り、定年制によって職業労働から撤退した（またはさせられた）老人は、社会的分業の一環の担い手として、つまり主体として、成立しないということになる。

また、思想的基盤としての老年観は副田が考察しているものとして4つの類型²⁾となるが、このいずれもが「老人の差別と孤立の思想」の反映であり、「主体的な生き方をとりあげる老年世代論の思想的基盤となりえない」と語る。上野もこの点について一致している。「向老期のアイデンティティ危機」が生じる根本的原因は、老人に対して近代社会が用意している社会的アイデンティティが、すべて否定的なものでしかないというところに起因している。「『老化』がこの否定的アイデンティティの同一化を意味する限り、『古い』を受容することは困難と苦痛に満ちたプロセスにほかならない」（上野 1986： 135）のである。

ここに来て、老年世代論・老後問題論は、老年期特有の問題という枠を越えて、現代社会における幼年期から青年期、壮年期を含む「人生全体の

スケジュール編成を規定する社会的価値＝人間形成観」（小倉 2001： 52）の問題、「近代的人間観の可能性と限界とを射程に捉え得る」（木下 1997： 20）問題へと展開している。中村達也のライフサイクル観の考察もこの文脈の上で考えることができるだろう。中村は「生産性と効率を旨とする産業社会の論理が、人々のライフサイクル観に影を落としている」（中村 1992）と述べ、人間の生涯全体 L を 11（年少人口・就学人口）、12（生産年齢人口）、13（老年人口）に区分している。「生産性と効率を旨とする産業社会の論理」は、12の重要性を相対的に高め、11（＝準備期間）、13（＝余生）をそれに従属的に序列化する。このことをボーヴォワールは「若者は彼をくわえ込もうとするこの機械仕掛けを恐れ、ときとしては舗石を投げてでも身を守ろうとする。この機械仕掛けから吐き出された老人は、疲れきって、裸であり、もはや泣くための目しかもたない」と表現する。（ボーヴォワール 1972： 640）またプラースやリンハルトは、近代化に伴って「生産性と効率を旨とする産業社会の論理」、または「道具的活動主義」の人間観が敷衍し、「若さ」の強調と「古い」の廃退が生じたことを指摘している³⁾。

以上の問題に対して副田は、「社会の主体としての人間を、その機軸の部分で、経済的分業の担い手、労働に従事する者としてのみ措定する発想を転換しなければならない」（副田 1978）と述べ、上野は『「老後」に否定的アイデンティティしか与えられない近代産業社会の価値の総体を、問い直すこと』（上野 1986： 136）にその策を見出している。これらの議論から、老年世代論・老後問題論が最終的につきつけているのは、次のような問いであろう。生産性・労働力としての価値が減退し、科学技術の進歩についていけない老人が、それでもなお生き続けることに、社会はいか

なる肯定的な意味を付与することができるのか。人間の評価において、世代や性を超えて産業社会の業績主義的な論理を貫徹すれば、人生曲線は壮年期の男性を頂点とする「山型のパラダイム（カウフマン 1988： 5）」にしかならない、というものである。

しかし、「老いは凋落である」というこの「山型のパラダイム」は、「古い」の一つの見方でしかない。老いのネガティブ・イメージの極をボーヴォワールの『古い』に求めるとすれば、老いのポジティブ・イメージという他方の極をフリーダンの『老いの泉』に見出すことができるからだ。現代の「古い」という現象に対する評価は、このネガティブ・イメージとポジティブ・イメージの間を揺らいでいる。「古い」は〈実存の避けられない宿命〉と、くさるる可能性を持つ第三の世代〉という両極に跨る様相を示している。

4 分裂する老いのイメージ

「老人問題史観」の視点は、その老人像の捉え方の前提に、過剰に否定的な老人イメージが措定され、非「老人問題史観」の視点では、人生の「山型パラダイム」というものが、議論の底流に存在していた。この反作用として、近年ではフリーダンの「活動主義的の老人像」が出現している。この状況をどう捉えたらいいのだろうか。

ボーヴォワールの『古い』とフリーダンの『老いの泉』という両極の議論に対しては、次のような評価がある。上村くには、「ボーヴォワールは『老いは素晴らしい』という甘い欺瞞に満ちた神話を否定するあまりに、『老人はおぞましい』というもう一つの神話を否定するどころか、かえって強化してしまった」（上村 1997： 90）と語る。一方、『老いの泉』の訳者である寺澤恵美子は、フリーダンの老いの捉え方について、「〔反「老いの神話」〕という別の成長中心主義的な老年

観を無意識のうちに築いてしまう危うさ」を指摘し、『『老いの泉』は、どうしても『若さの泉』に対抗して探し出されたもののような気がしてならない。それはやはり、産業社会の競争原理にとらわれて、『若さ』対『老い』という対立概念から抜け出られない』（寺澤 1997: 107）と語っている。これに似た批判として、木村康仁は「老いの非合理性は限りなく合理的文脈に変換され得るかのような幻想が支配的であり、それはまた、高齢であっても壮年期と同程度に活動的な老人像という、老いの非合理性を無化しようとすることによって、ある種の解放の論理を謳う」（木下 1997: 20）というものがある。

これは「老い過ぎた」高齢者像と「老いない」高齢者像、「依存的」存在と「自立的」存在という対比で捉えられるだろう。この二つの「老いの神話」には、相互依存的に対立する神話を議論の踏み台とし、双方にその根拠と、批判が寄せられる。このような両極に分裂する老人イメージ・老いのイメージが出現する理由には、老人像の構成のされ方が「65歳以上」という、なんの根拠もない歴年齢による老年期の区分に依拠していることからくる。一方で中年期と何も変わらないような高齢者と、深刻な身体的衰退の段階にある高齢者が、現実にも多様なかたちで存在している。それを一括し、「老い」や「高齢者」を議論すれば、ネガティブな極からポジティブな極まで両極に分解するのは当然であろう。

この分裂させる視点から生み出される高齢者像に対して藤崎宏子は、「高齢者をひとしなみに『社会的弱者』とみなす議論はあきらかに誤った社会認識にもとづいている。しかしながら悲観的なステレオタイプの高齢者像に反論しようとして、高齢者の有用性や活動性を過度に強調する論にも、もろ手をあげて賛同はできない」（藤崎 1998: 258-259）と述べる。木下も同様に「元気に

動ける段階では趣味や学習などで社会参加することが奨励され、日常生活の援助が必要になった段階に対しては福祉や医療の論理が発動され、援助の対象として理解されている。しかし、遊民化と保護の観点から描かれる老いとは存在感の希薄な、あまりにも萎えた像しか結ばない」（木下 1997: 20）と指摘している。

この分裂する高齢者像は、「西欧近代型の『自立した個』（天野 2001: 55）の限界を露呈させているように思われる。この視点には①〈自立的＝活動的＝能動的＝主体的〉という有用性の観点から形成された「老い」のポジティブセットと、②〈依存的＝停滞的＝受動的＝客体的〉というネガティブセットが対となって前提にある。社会的有用性という一元的な価値意識によって、①は役に立つ高齢者（＝望ましい人間像）、②は役に立たない高齢者（＝望ましくない人間像）と分断し、「老い」を両極へと無化する視点であろう。藤崎や天野が言うように、「自立」概念を「経済的自立」「身辺的自立」「精神的自立」の三側面に分けるならば、「精神的自立」こそがその核心であり、他の2つが他者に依存することがあっても自立の価値を損なうものではないという考え方もできる。「個人の自立は程度の差はあれ、他者への依存なしには成り立たない」（天野 2001: 57）ことへの認識が必要である。この認識がもてれば、「主体的に生きるには、活動的でなければならない」、「依存的な生き方では主体的な存在になり得ない」という誤謬を犯すことはなくなるだろう。問題は、老年期の生の現実が、社会的有用性の価値から見て否定的（依存的－停滞的－受動的－客体的）か、肯定的（自立的－活動的－能動的－主体的）かということではなく、自らの行為の決定権が高齢者自身的手中にあるかどうかであり、高齢者を取り囲む制度や他者がそれにいかに関われるかということであろう。これは高齢者の

主体的あり方と社会的諸関係のあり方の関連性、つまり「関係の自立」——他者との支え合いの過程で構成されていく一人ひとりの自己決定性——という概念（天野 2001：18-20）と結び付けることができる。老人のイメージがポジティブ・ネガティブの両極へと分断される状況のなかで、この概念は両極を統合し得るものであろうと考えられる。

5 老年期の課題と社会的諸関係

これまでの議論の根底にある高齢者研究の問題点は、高齢者や「古い」の社会的に構成されたイメージが高齢者の捉え方の前提に潜んで、その視点に暗黙の影響を及ぼしてしまうということであった。このイメージの構成のされ方は、一元的な価値の基準によって人間を評価してしまうことに起因しているように思われる。その代表が「若さ（健康な成人男子）」の基準から老年期を眺めるということである。栗原彬によれば、

「若さ」=有用性・生産性・新しさ・進歩・開発
・柔軟さ・明るさ

「古い」=無用性・非生産性・古さ・退行・停滞
・頑迷さ・暗さ

となり、社会システムが「古い」と「高齢者」を制作する過程は、①外からの眼差しによる「古い」のはりつけ、すなわち「古い」の外在化、②制度への「古い」の客体化、③「古い」の内面化、という過程を踏む。（栗原 1997：51）老年期を主体的に生きるには、「若さ-古い」の不均衡な対立項の内面化プロセスから脱することが必要であろう。

老年期は幼年期・青年期・壮年期・中年期を経たライフサイクルの最終段階である。老年期の課題は、栗原のいうこの一元的な生産年齢期間までに通用した社会的価値を相対化できるかどうか、ということになると考えられる。この「相対化の

作業」をユングは「午前から午後へ移行することは、以前に価値ありと考えられていたものの値踏みの仕直し」（ユング 1977：123）と表現している。「古い」がその当事者にとって、意味あるものになるのかもしれないのかは、この「値踏みの仕直し」にこそあるのであって、この作業がよりよい「古い」、つまり栗原の①~③の過程を脱する契機になること、一元的な価値から自由になる契機となることは間違いない。研究者やまだ老年期に達していない者が、老年期の価値付け、意味があるのかないのかといったことを議論し、いたずらに悲観したり、高揚したりするのは不毛ではないだろうか。問題は、当事者のこの「値踏み仕直し作業」過程の解明にあると思われる。

Erikson は老年期の発達課題を統合（ego integrity）／絶望（despair）の対として定式化している。この対立命題が要請する老年期の特質は英知（wisdom：死そのものに向き合うなかでの、生そのものに対する聡明かつ超然とした関心）である。「統合」とはそれまでの人生の「一貫性と全体性」の感覚である（エリクソン 1989：79-86）。この統合に非常に深く関わる作業が、ユングの「値踏みの仕直し」であり、この作業は「統合」が「英知」を要請するように、必然的に、カウフマンのいう「体験を解釈する主体」（カウフマン 1988：17）といものを要請するように思われる。〈自己〉は過去から意味を引き出し、それを解釈したり創造しなおすことによって現在を生きるための活力を得る。現代社会の「古い」に付きまとう困難は、序列付けられた価値を渡り歩かなければならないこと、そしてそれを自ら再解釈し、新たな価値の下に再生しなければならないことだと考えられる。

この社会的に価値付けされた「古い」から、自ら新たに創出した「古い」へと展開するのに、人生の「値踏み作業」は物語性をおびる。過去の経

験的出来事に対する解釈は、現在の視点から見て有意義な出来事の秩序化・構造化によって生じるからである。(浅野 2001) そのため個人や共同体の人生や歴史は物語性をおびている(株本 2000)。上野千鶴子のいう「向老期のアイデンティティ・クライシス」、「自我同一性の危機」とは、「人生の物語の破綻」と読みかえられる。井上俊は「物語の重要な働きの一つは、自分の人生を自分自身に納得させるということにある」(井上 1996)という。納得のゆく人生の物語があってこそ、「平和な日常生活のなかにある私たち自身も、人生に耐え、世界と和解」できる。「経験の物語性のおかげで、過去(記憶)と未来(期待)を現在に結び付けることができ、人生を多少とも一貫したものと感じることができる」のである。

一貫した人生の物語が、「道づれ」(convoys)によって共同構築されると指摘したのはプラースである。「他者とのかわりあいのなかで確認され批准される自己イメージ」(プラース 1985)という表現にあるように、道づれは自己イメージの中核的な不変性と、変化していく自己の連続性を保証してくれる存在である。プラースによれば、「道づれ」は「第一次集団(primary group)」「重要な他者(significant others)」「パーソナル・コミュニティ(personal community)」と同じような意味を帯びている。道づれとの長い関わりあいのおかげで、確実に訪れる老年期の社会的変化や、喪失、死の不安に抗して、成熟——老い——という不確実な感覚への希望を持ちつづけることができる。「日本人の文化的悪夢は、他者から切り離されてしまうこと」。つまり、成熟の物語が途絶えてしまうことである。

プラースの相互作用の結節点としての人間——親密な関与者たちの織り成す長いかわりあいを通して発展していく人間性——に類似する考えは、木

村敏の「あいだの歴史」にも見ることができる。「自己は、恒常的な実体もしくは持続的な状態として同一性を保っているのではない。自己は絶えず(重要な他者とのあいだの)反復においてのみ自己の同一性を保っている」(木村 1981)。浜口恵俊のいう「間人主義」という概念も、これに類似する。「実在するのは、そうした唯我的な主体性の保持者ではなく、既知の人との有機的な連関をつねに保とうとする関与の主体性の持ち主、すなわち『間人』であろう。人間関係のなかで始めて自分というものを意識し、間柄を自己の一部と考えるような存在である」(浜口 1982: 6)。これらの関係論的自己の考え方は、エリクソンの「自我同一性の感覚」が自己の固有性と時間的な流れのなかで生じる変化を見守る「重要な他者(道づれ)」の存在に依拠しているということを示唆するものである。

以上の考察から、高齢期の社会的諸関係と「老い」との文脈で次のような方向が示される。まず老年期の自己決定性・主体的な生き方と社会的諸関係——関係的自立——の可能性。そして老年期の人生の「統合」に関わる物語性を帯びた「値踏み」作業と社会的諸関係——共同構築される人生——の可能性である。これらの方向性は全体的に見るならば、老人の孤独、介護・生活問題(=老人問題史観)とネットワークという「サポート」の観点から捉えられた側面に加え、老年期の成熟・老いの意味との関連でネットワークを考えていく方向を模索するものである。

6 事例の紹介とサーベイ調査結果の要約

これまでの議論を参考に、老年期の生活の営みと社会的諸関係を関連づけながら、サポートという観点とそれだけでは覆い尽くせない関係の意味側面も含めて、以下の事例から探索的に考察していきたい。

表1 聞き取り調査対象者一覧

	対象者	性別	年齢	世帯形態	世帯外ネットワーク規模			
					別居子	親戚	近隣	友人
都市 郊外	W*	男性	72歳	単独	2	3	0	3
	T*	男性	68歳	夫婦+子供夫婦	2	2	0	3
	A	男性	71歳	単独	2	2	2	3
	S*	男性	72歳	単独	2	1	1	3
	K*	男性	63歳	夫婦+親	1	3	0	0
	N	男性	75歳	夫婦+親	2	2	3	3
	Z*	男性	72歳	単独	2	6	4	6
都市 郊外	I	女性	75歳	夫婦	5	3	7	3
	G	女性	75歳	三世代	2	3	3	5
	U	女性	73歳	三世代	0	3	8	3
	Y	女性	65歳	単独	2	0	3	3
	M	女性	65歳	単独	3	1	2	5
	B	女性	78歳	単独	4	2	2	3
	P	女性	67歳	夫婦	2	3	4	4
東北 農村部	V	男性	71歳	単独	3	9	4	2
	D	男性	67歳	夫婦	3	6	8	5
	R	男性	88歳	夫婦	5	8	4	3
	L	女性	66歳	三世代	2	5	3	0
	X	女性	75歳	単独	3	2	5	3
	F	女性	76歳	三世代	3	3	7	3
	O	女性	78歳	単独	2	12	5	3
	C	女性	69歳	単独	2	10	10	3

(*マークは本稿での分析事例。近隣と友人の規模が結合してある事例は、対象者がネットワーク成員を近隣・友人カテゴリーに峻別できなかった場合である。)

聞き取り調査は、2001年度のサーベイ調査に協力していただいた対象者(455名)のなかから、聞き取り調査協力依頼欄に署名していただいた方を対象として行った。この署名していただいた方(約80名)のなかから、30名の方に対して聞き取り調査を行った。この際、聞き取り対象者としてピックアップしたのは主に単独・夫婦世帯に生活する高齢者である。調査形式は自宅への訪問面接で、時間は一人当たり2時間~3時間である。なかには2回の面接を行った方も含まれ、個人差がある。本稿では紙幅の都合から、ある程度の情報量が得られた大都市郊外(学研都市京都府

域)に生活する高齢男性の5つの事例に限定し、考察したい。

事例の紹介に入る前に、サーベイ調査から得られたネットワークの構造的な特徴に関する簡単な知見を、性別とコミュニティの2つの観点からまとめると以下のようなになる⁴⁾。

1) 都市郊外・高齢男性のネットワークパターン
都市郊外に生活する高齢男性のネットワークパターンは、他のパターンと比較して相対的に小規模ネットワークである場合が多い。その特徴は近

隣関係の希薄さと、子供を除いた親戚関係の希薄さにある。したがって、ネットワーク構造における重要性・依存性の比重は、単独世帯に生活する高齢者の場合は別居子ネットワークに、夫婦世帯・三世帯世帯に生活する高齢男性の場合は別居子ネットワークや妻・同居家族成員に偏る傾向が見られる。

2) 都市郊外・高齢女性のネットワークパターン

都市郊外に生活する高齢女性のネットワークパターンは、都市郊外に生活する高齢男性のパターンと比較して、近隣関係、友人関係の規模や生活上の重要性が増す傾向にある。しかし子供を除いた親戚関係は高齢男性と同じように希薄である。したがって、ネットワークタイプでは近隣・友人・別居子ネットワークを中心としたタイプが優位になる傾向にある。

3) 東北農村部・高齢男女のネットワークパターン

農村部に生活する高齢男女のネットワークパターンは、都市郊外高齢男女のパターンと比較して親戚関係・近隣関係に生活全般の重要性・依存性が増す傾向にある。なかでも、親戚関係への傾斜は、都市郊外ネットワークパターンと、農村的ネットワークパターンとを識別する目安となる。したがって農村部高齢男女のネットワークパターンでは、別居子・親戚・近隣ネットワーク（同居世帯ではこれに同居家族を含む）を中心とするタイプが優位になる傾向が見られる。

7 社会的諸関係の状況

1) 事例1 Tさん 娘夫婦と同居 68歳 自動車製造販売業定年退職 ネットワークタイプ：友人型または孤立型

① Tさんの簡単な経歴

1933年大阪生まれ。大阪府内の高校卒業後、自動車

部品製造会社に就職し、現場で働く。28歳に結婚。一貫して続けてこられた職業については、「職人気質の時代が終わって、年功序列の時代も終わって、ロクな時代じゃないね」と述べる。職業期間では関西圏内で社宅や団地を4回引越し、この団地（2階）に入居したのは1988年のことである。子供は3人（長女37歳、次女36歳、長男32歳）おり、それぞれ結婚している。6年前までは息子夫婦と同居していたが、息子の仕事の関係で別居。その後、入れ替わりで次女夫婦とこの団地で同居を始めた。次女夫婦には子供がいないため、Tさん夫婦と、次女夫婦の4人世帯である。Tさんは自動車部品製造業のU会社を60歳で定年退職し、現在は奈良県S周辺の駐輪場で週4日働いている。

② 同居家族との関係

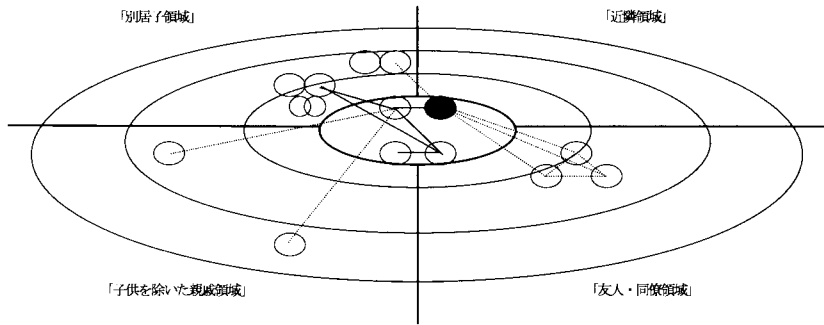
次女夫婦とは、「ローンの支払い」の都合から同居しており、Tさんは別居を望んでいる。食事・部屋・風呂の時間が次女夫婦とは別々で、「修正直系家族」の形態をとる。婿との関係については、年代も趣味違い、酒も飲まないことから会話が少なくコミュニケーションが難しいと語っている。配偶者や次女との会話が駐輪場の仕事の関係からあまり会話がなると語る。歩いて5分ほどのところに住んでいる長女と次女、Tさんの妻とのトライアングル関係が存在し、Tさんはそこから取り残されるかたちとなっている。

③ 別居子との関係（2名）

Tさんの生活する団地の棟から5分ほど歩いた棟に長女家族は生活している。週に1度はTさん宅を訪れる。孫を連れてくることもあるというが、Tさんは仕事で外出することが多く、長女はもっぱらTさんの妻や次女と会話しているという。長男は京都に在住、車で45分ほどのところで夫婦のみの生活を送っている。息子は「経済的に助けにはならない」と述べ、会うのは盆と正月の年に2回と距離のわりには疎遠である。「父親は娘にはケムタがられる」「あんまり話しはしない」と述べている。

④ 親しい親戚関係（2名）

滋賀県の妻方の弟1人（妻方の実家を継いでいる）、横浜の妻方の妹1人が挙げられている。Tさん自身のきょうだい（兄弟2人、姉妹1人）とはほとんど付き合いがないと述べ、パーソナル・ネットワーク成員としては挙げられていない。妻方の親戚との付き合いは



(はネットワーク成員を表す)
 (は対象者：egoを表す)
 [楕円は内側から同居家族領域：近距離領域（徒歩圏内）：中距離領域（車で30分～1時間）：遠距離領域]

図3 Tさんのパーソナル・ネットワーク

妻方の両親（滋賀の弟と同居）が亡くなると薄くなったと述べる。

⑤ 親しい近隣関係（0名）

Tさんは近隣関係が「まったくない」と強調する。「このマンションに誰が入ってきて、住んでるんだかも分かりません」と語り、近所の子供たちとの接触も少ないという。老人クラブに関しては、「腰が曲がって、ヨボヨボの人の集まり」と表現しており、同年代の男性高齢者との付き合いも希薄であると語っている。

⑥ 親しい友人関係（3名）

Tさんの友人は駐輪場で働く60代の男性、3名であるという。実際に会うのは仕事の時だけで、それ以外は会ったことがないという。仕事時代の同僚関係については「年賀状でのやり取りくらい」と語り、それも「定年1年後に300枚書いていたものが150枚に減り、年々半減していくよ」と語る。駐輪場は70歳までしか働けないため、駐輪場での友人関係は仕事を辞めた後に同僚関係と同様になるかもしれないと語る。

2) 事例2 Kさん 母親と夫婦の世帯 63歳

M社管理的職業定年退職 ネットワークタイプ：妻依存型

① Kさんの簡単な経歴

1938年、満州生まれ。終戦後1946年に父親の仕事の関係で大分へ移住。関西の大学に進学し、卒業後、大阪のM会社に就職。1963年25歳で結婚。1964年に息子が誕生し、その育児環境を考慮して京都府城陽市に

移住。子供は息子一人である。1989年、息子が仕事の関係で東京に移住し、一時夫婦世帯の生活となる。息子は1992年に東京で結婚する。1993年、Kさんの妹夫婦と同居していた実の母親を引き取り、Kさん夫婦と母親の2世代世帯の生活に入る。1996年からこのKさんの母親（現在85歳）が介護の必要な状態（介護度3）となる。1998年、60歳でM社を定年退職し、それを機に環境のよい現住所へ移住。去年（2000年）の4月から知人の紹介で、この地域のコミュニティ・センターで事務の仕事（月曜～金曜の午前9時～午後5時）をしている。Kさんの母親の介護はもっぱらKさんの妻が行っている。

② 妻との関係

Kさんにとっては配偶者が、もっとも重要なネットワーク成員である。もっぱらの楽しみは妻との旅行であると語っている。家事はKさんが現在働いていることもあってほとんど妻が行っている。Kさんの母親の介護も妻の役割である。このことについては「妻は古い人間というか、世間体が強いんでしょね、『姑の面倒は嫁がみる』って信念をもっているんですよ。ホームヘルパーを家に呼んだりはいしませんね。妻の体力、母親の状況如何では、これからそういうことも必要になるかもしれませんが、今のところは考えていません」と語る。

③ 別居子との関係（1名）

一人息子（37歳、2児の父）は仕事の関係上、東京に在住。会うのは年に3回（盆、正月、春休み）であ

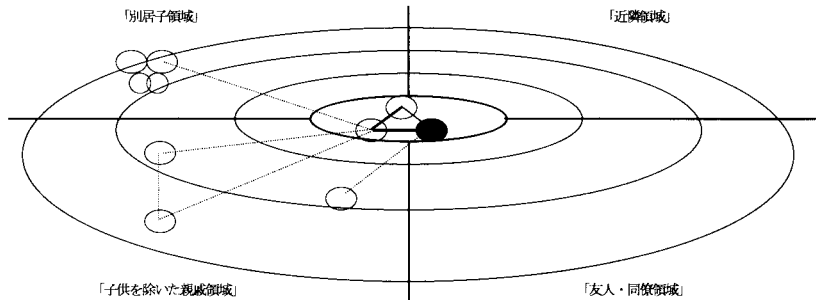


図4 Kさんのパーソナル・ネットワーク

る。息子の嫁とKさんの妻は電話でよく話しをするが、Kさん自身はほとんど電話で話しはしないという。家庭の相談事もあまり息子とはせず、「自分で考えて、自分で決めていく。息子に頼ることは何も無い。」とKさんは話す。今後同居することも考えていない。

④ 親しい親戚関係 (3名)

妻方の姉妹(姉が2人、千葉県と大阪府に在住)とKさんの妹1人が兵庫県に生活している。妻方姉妹との関係は「妻の付き合いの手助け」程度で、Kさんの妹とは冠婚葬祭時に会う程度と、いずれも親密な付き合いではないという。何らかの問題が生じた時でも親戚には「期待しない」と述べる。Kさんの仕事の関係や、母親の介護をめぐるイザコザが、親戚との付き合いを希薄化させた要因の一つと考えられる。

⑤ 親しい近隣関係 (0名)

「近隣関係は妻に任せていて、家に来ることはあっても妻が対応する」とKさんは述べる。そのために、Kさん自身が個人的に付き合っている近所の方はいない。知り合いの勧めから、老人クラブに一時加入していたこともあったが、政治的問題を老人クラブに持ち込む役員がいたこと、新しい仕事が入った事を理由に辞める。今後、老人クラブに入るつもりはないと述べる。

⑥ 親しい友人関係 (0名)

友人との関係は、会社時代の同僚と年に一度、OB会で会う程度で、個人的付き合いで余暇を一緒に過ごしたり、お互いの家を行き来するような関係ではないと述べる。Kさんは自らのことを「会社人間」と語り、同僚関係は利害関係であって、安心して付き合える関係ではなかったと述べる。

3) 事例3 Wさん 単独世帯 72歳 現役の弁護士 ネットワークタイプ：孤立型

① Wさんの簡単な経歴

1929年、京都府生まれ。終戦の年(Wさん16歳)に、父親が牢獄の中で死亡。24歳の時に司法試験合格、26歳で検事となる。27歳に見合い結婚し、28歳の時に長女誕生、次いで32歳の時に長男誕生(以上子供は長女、長男の2名)。四国、大阪の職場を転々としながら、1970年(41歳)に現住所、京都府京田辺市に移住する。1975年から1987年まで京都府議会議員を務める。41歳の時に弁護士に転職。1979年(50歳)の時に長女が東京の裁判官の方と結婚、長男はWさん55歳の時に東京へ移住し、その後12年間夫婦世帯となる。1996年8月に妻が64歳で直腸癌で死去し独居生活となる。妻死去後、4ヶ月後に学生を間借りさせ、現在に至る。

② 別居子との関係 (2名)

2名とも東京在住。娘夫婦とは年に5回ほど、Wさんから出向くこともあれば、盆、正月には娘夫婦が帰郷する。娘は現在2人の息子(中学2年生と小学5年生)の母であり忙しいことが多い。体面的接触よりも、距離が遠いために電話での交流(月に2、3回)が行われている。息子との接触は盆、正月に息子さんの方から訪れる。Wさん自身は娘さんとの直接の交流を望んでいる。今後、Wさんは息子との同居を望んでいるが、息子がまだ結婚していないこと、また息子の側に同居する意思がないため不満を漏らしている。

③ 親しい親戚関係 (3名)

2人は大阪府(亡くなった妻の弟夫婦)、もう1人は

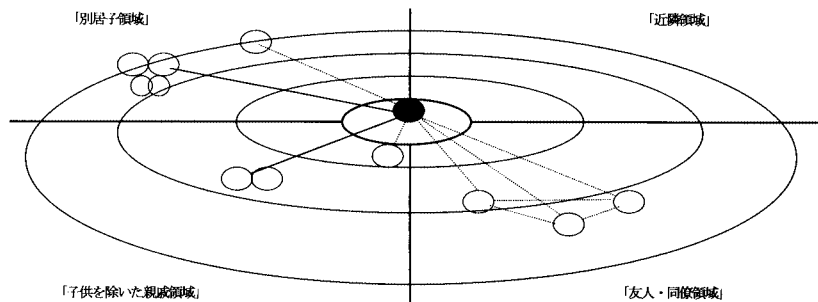


図5 Wさんのパーソナル・ネットワーク

歩いて15分程の近隣地域内（亡くなったWさんの妹の夫）の親戚と付き合っており、2カ月に1、2度カラオケに行く程度の付き合いをしている。大阪府に在住のWさんの弟夫婦は2カ月に1度の頻度でWさん宅の掃除、庭の清掃をしていく。ただし、この時Wさんは仕事で外出しているため、義理の弟夫婦と会うことはほとんどなかった。

④ 親しい近隣関係（0名）

年に3回ほどの地域の清掃活動に参加するかしないかの程度で、親しい人はいないという。「近隣はいざという時に助けにはならない」と答えており、町内会については「形だけ参加している」と述べる。この原因はWさんの居住移動の多さ、現住所に引っ越した時期と関係があるようである。近隣関係は専ら妻が行っていた領域のため、妻の死後、Wさんは近隣関係から孤立している。

⑤ 親しい友人関係（3名）

囲碁クラブを含めて25人ほど、しかしその中で親しいと感じているのは囲碁クラブではない3人である。その3人はいずれも青年時代の学友（1人は小学校時代から、2人は大学時代から）であり、職業生活では親しい友人はできなかつたと述べる。なぜなら「職業生活は利害関係で結ばれた関係であって、学友のような心から信頼できる関係ではなかつたから」らしい。この学友の3人は住居が離れているために年に2、3回ほどあって酒を交わすという非日常的な付き合いである。

4) 事例4 Sさん 単独世帯 72歳 建設会社 事務職を定年退職 ネットワークタイプ：別居子型

① Sさんの簡単な経歴

1929年、大阪生まれ。関西の大学卒業後、建設関係の会社に入社。22歳の時に結婚（妻は当時20歳）。24歳の時に長男誕生（現在48歳）、26歳の時に長女誕生（現在46歳）。以上子供は2人おり、いずれも結婚し、孫は全部で5人（長男方3人、長女方2人）いる。職業生活の間に関西圏で3回の引越しを経験。4回目の引越しが、現在生活しているニュータウン地区にあたり、1989年に入居した。それ以前は京田辺市付近に約20年間生活していた。この京田辺市での生活の間に子供は2人とも巣立ち、夫婦家族の生活が約22年間続いた。建設会社は56歳で定年。その後1996年まで農業共同組合へ再就職していた。1999年に妻が67歳で亡くなり、現在は単独世帯で生活している。

② 別居子との関係（2名）

2名とも結婚し、それぞれが徒歩圏内に核家族を形成している。Sさんとの接触はもっぱら夕食時で、月に約20日間は娘の家族に出向き、月に10日間は息子の家族に出向いて一緒に夕食をとる。息子方の孫は小学校3年生で、学校の宿題をSさん宅にきてするという。Sさんは単独世帯といっても、その主観的家族境界は娘夫婦、息子夫婦も含まれている。一見円満な修正拡大家族的連帯に見えても、Sさんには悩みがある。それをSさんは「経済的シガラミ」と表現している。食事費用として「息子のほうには月1万円、娘のほうには月2万円」渡しており、子供の住宅資金も援助した。「子供側の見えない要求」に対して気にかけて

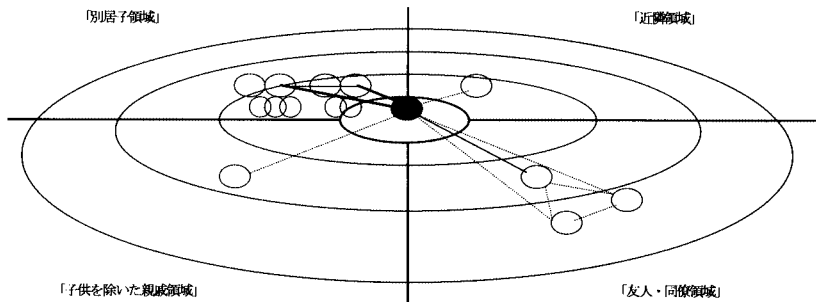


図6 Sさんのパーソナル・ネットワーク

いる。

③ 親しい親戚関係 (1名)

亡くなった妻の姉(奈良)と年に数回会ったり、手紙を交換する程度。Sさんの話しでは、妻方の兄弟は妻を含めて5人(女4人、男1人)で、妻の生前中は年に4、5回会って旅行することもあったという。「子供が小さい頃は、妻方のきょうだいに女性が多かったせいか、良く子供と一緒に遊ばせていた。そういうことから、Sさんは自分のきょうだい(兄2人、妹1人)との交際はほとんどなく、妻方のきょうだいとの交流が多かった」と語る。Tさんと同じように父系的親族観はない。しかし妻の死後はその交流も薄くなったという。イトコなどきょうだい以外の関係はほとんどなく、あっても「冠婚葬祭時のお付き合い」と述べる。

④ 親しい近隣関係 (1名)

親しい近隣は「隣のおばあちゃん」で、かつて妻と仲が良かった人であるという。その近隣の方も去年夫を亡くされた方で話しは会うというが、「相手が一人暮らしのおばあちゃん」だから、付き合い難いという。また、Sさんは「近隣」について「ニュータウンというのは、大阪の下町の頃とはだいぶ違って、垣根と壁と扉で遮られて、交流ってものがないです」と語る。

⑤ 親しい友人関係 (3名)

Sさんの友人関係は会社の同僚時代の友人3名である。一人は京都府城陽市、残りの2人は滋賀県に住んでいる。接触の仕方は、「2ヶ月に一回程度のゴルフ」という。会社の同僚関係についてSさんは「同僚との関係は薄くなる」と述べている。最近、社会福祉協議会の活動で知り合った2名の方は、まだ「知人」の段階で「家庭の事情や悩みを打ち明けられるような関係ではない」という。友人とは「10年以上の付き合いの

なかで気心が知れてくるもので、そうなってはじめて色々な悩みの相談相手にもなる」という。Sさんにとっての「友人」関係とは、情緒的な絆やカウンセリング機能のある温かな間柄を指しているようである。

5) 事例5 Zさん 単独世帯 72歳 小学校校長を定年退職 ネットワークタイプ：全般型

① Zさんの簡単な経歴

1929年8人兄弟の長男として生まれる。16歳の時に終戦を迎える。戦争中の1938年頃からの物不足の記憶が強い。1945年の中学入学時から親元を離れ、1947年農業の勉強のために青年師範学校に入学、その後1949年に京都学芸大学に入学。日本史を専攻し、戦前の歴史教育と戦後のその違いに苦労する。1953年(24歳)に田辺小学校に教員として勤務。1957年に見合い結婚をし、12年間の独身生活が終わる。1959年長女誕生、1965年次女誕生(以上子供は娘が2人)。1975年に教務主任、1980年には教頭に昇格、1985年に校長となる。1989年、学校を定年退職。退職後65歳まで公民館に勤める。その後は「老人クラブの会長」、「社会福祉協議会の委員」、「スポーツ触れ合い協議会の委員」等をし、現在に至る。1996年に妻が死去。独居生活5年目である。出生から現在まで現住所近辺で生活している。

② 別居子との関係 (2名)

長女は36歳であるが、結婚はしないと決めている。過去の恋愛経験で、かなり苦い思いをしたらしいとZさんは語る。Zさんはこのことに関して何も反対してはいない。現在京都市内で塾の講師をしており、2週間に1回はZさん宅に訪れ、掃除や買い物の手伝いを

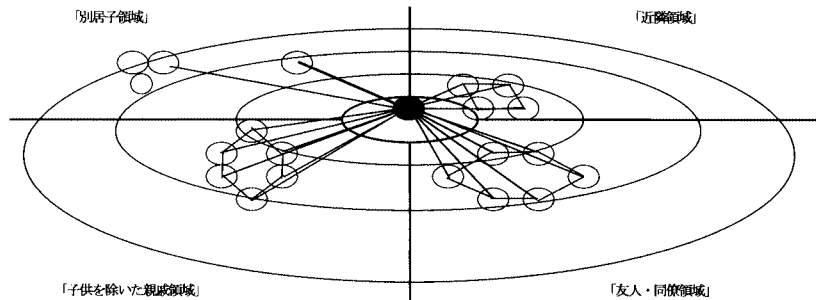


図7 Zさんのパーソナル・ネットワーク

している。「いずれ長女と同居する見込みで長女も同意している」とZさんは語っており、この長女がZさんにとって最も頼りになる「道づれ」である。次女は1992年に32歳で結婚し子供が1人いる。現在東京に住んでいる。盆と正月の半年に1回Zさん宅を訪れる。どちらの娘とも1週間に1回か月に数回は電話で連絡をとっている。

③ 親しい親戚関係（きょうだい6名）

6人とも京都府在住。半年に1回Zさん宅で集まり、自宅にあるカラオケで歌う。Zさんは長男であるが77歳で亡くなった母親は次男の世帯で暮らしていた。しかしZさんのきょうだいは老親の介護が必要となった時、きょうだいのうち何人かが交代で毎月5万円づつ老親の住む世帯へ預けて介護者を雇わせ、次男の世帯に負担を集中させなかったと述べる。このように老親の介護を金銭的にでも分担して行ったことはきょうだい間の連帯維持に作用したと考えられる。

④ 親しい近隣関係（4名）

昔から続いている隣組（隣接の4世帯）と付き合いが続いている。高度経済成長の始まる以前から京田辺市に生活しているZさんは、この地域の昔の風景に詳しい。昔の近隣は「周りに30件ほどの家しかなく、全員知り合いでした。夏にはクーラーなんてものはなかったから、みんな外に出てきて色々はなしたもんです」と語る。その名残が今もZさんの隣接世帯に続いている。実際に問題が起きて助けてもらったという経験はないそうだが、Zさんが留守時の「猫の餌やり」はお願いするという。またZさんは老人クラブの会長をされている。この老人会は会員60歳以上の方144名である。会費は1年に1500円で年に1回2万円以内の予算で温泉旅行に行く。老人クラブの中には写真クラブ、

ゲートボールクラブ、園芸クラブ、ペダント（フランスのゲーム）クラブなど独自の低位グループがあり、それぞれに活動しているという。健康のつどいも行っており、年に数回、医者を呼んで講義を受けたり、おどろき、カラオケの集まりもあるという。Zさんの場合は、老人クラブでの付き合いは、隣組の人々や、次に記述する友人と比べると、知人程度の付き合いで、親しいパーソナルネットワークの成員としては挙げられていない。

⑤ 親しい友人関係（6名）

「元校長」をしていた同年代の人ばかりの6名による「校長ネットワーク」を形成している。集まり方は2週間に1回～月に1回の程度で、以前は一人一人の家を順々に回って集まっていたが、今はもっぱらZさんの家へ集まることが多いという。マージャン、カラオケ、ボーリング等しながら酒を飲む。「教師という職業が一緒だったから、それまでの苦労が分かち合えるんです」と語る。

8 考察 小家族主義的な「道づれ」の編成と老いの位相

これまでに概観してきた大都市郊外に生活する5人の高齢男性の事例は、それぞれ異なった社会的諸関係と老いの局面を示している。前節の議論と関連させながらここで考察していこう。

まず社会的諸関係を可視化させた図を見渡すと、対象者それぞれが語る「道づれ」の最も重要な紐帯は「配偶者」か「実子」であるということである。近隣や友人、子供以外の親族関係はそこ

が空白か、または挙げられたとしても中心的な役割を果たしていない傾向にある。これは都市部に生活する高齢男性の既存の研究と一致する知見(玉野 1990、須田 1986)であり、大都市郊外に生活する高齢男性の「小家族主義的」老いの様相が伺われる。

具体的に対象者の語りからこのことを取り上げれば、事例2: Kさんは退職後の「伴侶性のなかの老い」のシナリオを表す代表例である。

妻とだけは一緒にいないと、ワガママを言う相手がいなくなります。私は旅行することが一番の楽しみですが、そういう時は、必ず妻と一緒にです。怒鳴り合いも彼女とだけはできるしね、まあ一夫婦のレクリエーションみたいなものですね。妻は自分自身のことを「女中」とも言ってますよ。そのままの自分で付き合える唯一の相手だね。(Kさん)

Kさんは同時に一人息子との関係について「お互いの存在価値」を保つために別居が当然と考えており、息子に世話をかけるならビジネス(介護施設や公的サービス)に頼ると語る。「伴侶性の物語」は、「介護の社会化」を背景に、伝統的「直系家族のなかの物語」に距離をとる新型の対抗バージョンの一つである。Kさんの母親の介護はもっぱらKさんの妻一人で行っていることから、子供関係からの「自立」は、夫婦関係への閉じた「依存」が可能にさせている。

では「伴侶性のなかの老い」というシナリオが見られない他の事例1・3・4・5ではどうだろうか。事例1: Tさんの場合では、配偶者、娘夫婦と同居はしているが、娘の夫との会話がないこと、長女-次女-妻のトライアングル関係から取り残されていること、近隣関係の希薄さを語っている。そのためにTさんの語りには、「伴侶性の物語」や「同居家族との物語」、「地域のなかでの物語」が成立する基盤が弱く、もっぱらの関心は

職業的な「男の物語」の終焉に向いている。

同居生活では、食事は年寄り夫婦と娘夫婦は別々で、部屋も別々、お風呂の時間がかち合わないよう気をつけてる。婿とは年代が違うし、趣味も違うし、酒も飲まないから、コミュニケーションが難しいですなあ。あんまり会話がないなあ。長女もこの近くの団地に住んでますが、良くここに孫を連れて遊びにきますよ。ただ、娘たちは、父親をケムタガりますな。ウチの妻とはよ一話しますが、私とは特に話しません。息子? ああ~息子がワシんとこ来る時は、金をムシリトリに来る時ぐらいですよ。この不景気だから息子の仕事も大変みたいです。私はローンのこともあるし、家の中でジッとしていてもあんまり暇なので、駐輪場でバイトしてます。週に4、5日かなあ。ただこの駐輪場のバイトも70歳までしかできないことになってて、これが終わったらどうなるのかねえ? 何をやっていいのかわからない。(Tさん)

老人クラブってのは、腰が曲がって、ヨボヨボの人の集まりって感じがして私は嫌ですね。行ってみても60代の人がいらないよ。(実際にTさんが加入している老人クラブ「N第2クラブ」の名簿を見てみても、会員41人中60代の方は3名だけであった。)75歳過ぎの人ばかり。男の数は少ないし、女は元気だあって感じですね。ここらで定年してクラブに入っていない若い(60歳以上75歳以下)男の人たちはなにしてるんかなあ?(Tさん)

ベッドタウン的な郊外のマンション生活では隣近所がまったくないよ。昔みたいな隣組的なもの、「お醤油貸してえー」とか、「砂糖貸してえー」だとか、そういうのが全然ない。まったく淋しいもんです。ワタシなんか、ここの3階に上がったことなど一度もないしね。誰が入ってきて、住んでるんだかも分かりません。マンションを出る時に会ったら、頭下げるくらいかな。妻は隣のおばあちゃんと知り合いみたいだけだね、それぐらいじゃないかな。近所の子供とも全然会わないし、昔なら子供と将棋したり、怪談話したりしたものだけだね。そういう相手

がないから、これ（スーパーファミコン）。これしてたら時間の経つのも忘れてしまいますわ。やっぱり男ってのは、働いていないとダメだね。（Tさん）

配偶者を失った高齢男性の3つの事例（事例3・4・5）で共通に見られた語りは、「妻が亡くなったのはショックでした。私が先に逝くと思っていた。」というものである。「ショック」というのはどのような性質を帯びたものだろうか。配偶者の喪失によって家事をはじめとする生活上のあらゆる側面で不都合が生じることに対する現実的な「ショック」というよりも、「伴侶性の物語」の破綻に対する「ショック」を表しているように思われる。「伴侶性の物語」が破綻した後に、書き換えられたシナリオの中心人物はいずれでも「実子」である。事例3：Wさんの場合は東京在住の未婚の長男、事例4：Sさんの場合には、居住地区内に生活している2組の子供夫婦、事例5：Zさんの場合には、京都市内に在住の未婚の長女が「道づれ」の中心的人物として選び出された。しかし、この新たなシナリオの書き換えには様々な困難が付きまとう。人生晩年の物語の書き換えは、選び取られた「道づれ」との共同作業のなかで行われるものであって、個人の内部で完結する性質ではないからである。

例えば事例3：Wさんは、妻喪失後、「長男夫婦と同居」という文化的な物語の要素を自らの物語として借用しているが、東京ー京都という遠距離問題があり、さらに長男は結婚に対し積極的ではなく将来同居する意志がない。そのためにWさんは物語の停滞に対して焦燥感と寂寥感に悩み、職業的・中年期的なアイデンティティを老年期に持ち越すことで物語破綻の危機を回避している。

僕は、最初に僕が死ぬとばかり思っていた。平均

寿命は男の方が短いでしょ。だから先に妻が死んでしまった時はショックだった。生涯のたった1人の伴侶を亡くしたのだと思ったよ。妻の死の時に僕は仕事で大阪に行っていて最後に臨んで僕の感謝の気持ちを伝えられなかったことを後悔している。怒りはなかったけど、孤独を感じた。あきらめと、なんとか受容しなければと努力した。家事はそれまで全て妻がしていたから、これからは1人でがんばらなければと思ったな。

でも僕は1人暮らしの経験はないから1人になると寂しさを感じやすいんだね。こればかりはどうしようもない。息子はまだ結婚もしていないし、東京で生活しているから、そうなると同居できるわけもないしねえ。やっぱり人は生まれてきたからには世帯を持って、子供を育てないとね。1人前じゃないね。息子は付き合っている女性がいなくていいわけではないんだけど、ホント、結婚しなくてね、相手さんも困っているのじゃないかな。（Wさん）

正月に帰郷していたWさんの息子の語り

結婚はそんなに考えてはいないんだ。いまは仕事（イラストレーター）が大変だから。内心は、おやじには悪いけれども、できれば同居したくないなあ。おやじとは法律家の道を強制されて、それに反抗していたら仲が悪くなってね。同居してもうまくいかないと思うよ。（Wさんの息子）

「追悼文集」に見られるWさんの心情

思いがけない君（妻）の死によって僕の生甲斐の9割はなくなった。あと1割の生甲斐と仕事をしなければという義務感、いろんな人と接したり酒を飲んだり、碁やカラオケをしたりひとときの気のまぎれ、そして君があの世界から微笑みかけているような気がして、何とかがんばってきたというのが本当のところだ。（Wさん編『追悼文集』からの引用）

2組の子供夫婦と近距離ネットワークを形成し生活している事例4：Sさんの場合では、Wさ

んとは異なって良好な三世代関係を営み「伴侶性の物語」から「修正拡大家族のなかの物語」へとスムーズに移行しているように思える。しかし、内心では息子・娘夫婦に対する「経済的シガラミ」を気にかけている。子供への住宅資金援助、日々の夕食費用の支払い行為は、「子供に負担をかけない限りにおいて」家族でいられるという「条件付き」の状態を示している。「これをしなかったら、絶対に向こうから文句が出てうまくいかなくなるでしょうね」という語りには、新しい物語の未発達を感じさせる。Tさんと同様、近隣・友人関係の希薄さも触れていることから、子供との関係へ閉塞する老いのシナリオが伺える。

妻が先に死んだのはショックでしたが、2年経ってなんとか朝飯と昼ご飯ぐらいは自分でやるようになりましたわ。男はね、会社に勤めてる時は、自分はなんでもできてると思ってるもんだけど、定年になると誰かに頼らないと生きていけない。女は炊事が苦にならんが、男はウチのことは弱いね。ウチの場合は、すぐそこ、歩いて10分くらいと同じ町内に二人ともいるんですわ。だから毎晩、かわりばんこに子供の家にお邪魔して、夕食を一緒にしてるんです。だから、まあ一所帯は違っても家族みたいなもので、困ったってことはそんなにありませんな。(Sさん)

家族のシガラミといいますかね。経済的なことで話にくいんですが、夕食を一緒にするといっても、タダではなくて、息子のほうには月1万円、娘のほうには月2万円渡しています。必ず受け取りますね。これをしなかったら、絶対に向こうから文句が出て、うまくいかなくなるでしょうね。これは確信できますよ。ちなみにもう少し言えば、子供の住宅を建てる時のことだったのですが、最初の息子の住宅を建てる時には、私がいくらか支援したんですが、娘夫婦が建てる時にはできなかったんです。それで、そのことで娘は内心、根に持っているんですよ。親といってもできることとできないことがある

から、そういう子供側の見えない要求というのは、一番のシガラミですね。(Sさん)

ニュータウンというのは、大阪の下町の頃とはだいぶ違って、垣根と壁と扉で遮られて、交流ってものがないです。そうそう、前に庭の堀でひっくり返って入院したことがあって、その時は声を出しても近所の人は来てくれないし、家の中まで這ってって電話して、ようやく娘に来てもらいました。あの時は一人やったら困った事になるねんなあと思いましたよ。ウチの場合は、子供が近くにいるからいいけど、仕事の関係で、子供がどっか遠くに行ってしまったら、それに替わるような近隣関係ってのは無理じゃないかと思います。せいぜい朝、晩の挨拶くらいかな。(Sさん)

一方、最後の事例5：Zさんの場合は、「伴侶性の物語」の破綻後、未婚長女との関係を機軸に、地域集団、近隣、友人、親族関係のなかで物語上の幾つかの伏線が張られている。まず職業的な自己は、老人会、社会福祉協議会、災害支援研究会といった地域集団への積極的な関わりによって断絶することなくその変化は緩やかであり、「校長集団」の高密度な連帯は、中年期から老年期にいたる自己イメージの変遷の保証人として人生の連続性の感覚を保つ働きをしている。中距離のきょうだいネットワーク、「隣組」的近隣ネットワークも他の事例と比較して付き合いが長く、高密度で規模が大きい構造を示しており、生活上実質的な機能を担っている。このような社会的諸関係の特徴が、「伴侶性の物語」の破綻に対する緩衝材となり、物語の書き換えが柔軟に行われたと考えることができるだろう。

妻は病気を患っておりましたが、私は自分の方が先に逝くと思っていました。保険金の受取人の名義が全て妻であったので、書きかえるのには苦勞しました。園芸の好きだった妻が死んでから『庭がきた

なくなったね」と近所の人から言われるのがいやなので私も園芸をするようになり、いつか趣味となりました。ご飯は自分で作りますが、一人で食べるのはあじけないです。それにトイレのペーパーがなかなか減らないのです。置いたものは置きっぱなし、消し忘れた電気は、つきっぱなしです。そんな時、妻は死んだんだ、私は1人なのだと感じます。

でも今は元気なので1人でも満足です。2週間に1度は娘（長女）が来ますし、電話で連絡もありますから。将来的には長女と同居しますしね。老人会の世話だの、福祉協議会だの、災害支援研究会だの、校長を辞めてからも色々あってね。昔の教員仲間ともちょくちょく会ってるんですよ。今は結構忙しいから、それほど退職後に急激な変化はありませんでした。（Zさん）

教師という職業が一緒だったから、それまでの苦労が分かち合えるんです。腹のうちがわかっているんで、なんでも話できますよ。このなかには、私みたいに奥さんを亡くされた人もいますしね。老人クラブを通しての知り合いよりも、ずっと親しくて、余暇を過ごす相手です。（Zさん）

9 事例分析からの結論

——関係の自立——

以上、5つの事例からの考察は、「関係の自立」という状態について示唆を与えてくれる。事例1・2・3・4は、「道づれ」が「小家族主義的」に編成されたものであるのに対し、事例5はそれとは異なる構造的特徴を示している。近隣関係や友人・きょうだい（親族）関係が相対的に希薄な小家族主義的「道づれ」編成では、人生の物語上のテーマが配偶者や子供との「閉じた関係」へと局所化せざるを得ない。この局所化された関係のなかへと閉塞する人生のシナリオは、選び取られた「道づれ」との折り合いがつかない場合に、重大な物語上の破綻（＝リスク）を背負うことになる。その結果、選び取られた関係の内実には、依

存性と制約（関係への縛り付け）の増大、本心からの「語りえなさ」からくる不満が含まれ、新たな自己アイデンティティの方向に対する自己決定性の減少が生じる。これは「関係の自立」とは反対の特性である。

関係のなかへと閉塞するシナリオの打開には、事例5に見られるように、「道づれ」が異なった社会圏のなかに重層的に配置されているという関係の基盤が必要である。異なった社会圏との関わりを保つことによって「関係間の自立性」が生じ、様々な関係に関わりながらも、特定の関係に制約されることがなく、自己決定性が阻害されないという「関係の自立」の状態が成立すると考えられる。「道づれ」の重層的構造、物語上のリスクの分散、自己決定性の確保によって、老年期におけるシナリオの「書き換え」や様々な伏線が生まれ、新しいアイデンティティの萌芽が促されることができると考えることができる。

大都市郊外に生活する高齢男性の問題は、老年期に入る以前のライフコース全体の過程に内在している。今回の対象者は「企業戦士」「仕事一途が男の生き方」「家族ぐるみの会社への奉仕」「仕事が趣味＝無趣味が誇り」といった1930～1945年生まれの「戦後世代」（天野 2001： 11）という背景をもつ。度重なる居住移動と〈家庭－職場〉という職住分離の生活パターンを蓄積させてきた彼らにとって、中年期から老年期への移行は、社会的諸関係に大きなダメージを引きずるものであった。このような都市郊外型高齢者の出現は、小倉康嗣が指摘しているように「その時々」に段階的に用意された特定の役割や集団への帰属に目的志向的に自己投入していくというライフコース・パターンが相対化され、その背後にある『個人の生涯』という時間の流れに対する社会意識の高まり（小倉 2001： 52）を招いている。老年期における「関係の自立」は、小家族主義的な夫婦や子供と

の「もたれあい」ではなく、より良い関わり合いを可能にするものであるが、この達成には社会的諸関係の重層的な結びつきと同時に、壮年期男性を頂点とする近代産業社会的な人生の枠組そのものの「問い直し」の必要性を感じさせる。

[注]

- 1) これによると、「①専門的知識の蓄積、②不測の事態への対応、③接客・対応能力」は「年齢とともに上昇」の割合が高く（分類 A+）、「④技術・技能の熟練、⑤指導・育成能力、⑥職場管理能力、⑦判断力、⑧理解力、⑨企画力・開発力」では「年齢とともに上昇」「上昇後一定」の割合が高く（分類 A）、「⑩粘り強さ、⑪集中力、⑫筋力・体力・視聴覚能力」は「低下および上昇後低下」の割合が高く（分類 B）、「⑬勤勉性、⑭積極性」は「年齢に関係ない」の割合が高い（分類 C）という結果であった。
- 2) ①客体的タテマエの老年観＝〈敬老思想〉、その裏

返し②客体的ホンネの老年観＝〈老人への蔑視・無関心〉、③主体的タテマエの老年観＝〈枯れた老人・老賢者〉、その裏返し④主体的ホンネの老年観＝〈子供に返った患者としての老人〉という4類型。

- 3) 「高度経済成長を達成した社会においてはどこでも若さが優先され強調されると断言できよう」（リンハルト 1986: 265）。「1860年頃から1960年の間に、アメリカでは老年はひたすらさげすみの対象となっていくたのである。この時代は進歩こそすべてと信じられていた時代、産業による救いの宗教が広まった時代であり、老人は廃退であるという理由でさげすまれた」（プラス 1986: 192）。
- 4) サーベイ調査結果の詳細に関しては、第52回関西社会学会大会（2001年5月26日）、「高齢期パーソナル・ネットワークの比較研究」および、第53回関西社会学会大会（2001年5月26日）、「高齢期パーソナル・ネットワークの構造変容と生活構造の外部化」にて報告。これらの研究は、三沢謙一を代表とする「地域共生研究会」の一環として、行われたものである。

[参考文献]

- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近』勁草書房。
安達正嗣, 1999, 『高齢期家族の社会学』世界思想社。
天野正子, 2001, 『団塊世代・新論』有信堂高文社。
———, 1999, 『老いの近代』岩波書店。
Blumer, H, 1969, *Symbolic Interactionism*, New Jersey: Prentice-Hall. (=H. ブルーマー, 1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房.)
Erikson, E, H, 1959, *Identity and Life Cycle*, W. W. NORTON COMPANY. (=E. H. エリクソン, 1973, 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房.)
藤崎宏子, 1998, 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館。
Friedan, B, 1993, *The Fountain of Age*, New York: Simon & Schuster. (=B. フリーダ, 1995, 山本博子・寺澤恵美子訳『老いの泉』西村書店.)
井上 俊, 1996, 「物語としての人生」『岩波講座：ライフコースの社会学』岩波書店。
Jung, C. G, 1948 *Über die Psychologie des Unbewussten*, Zürich (=C. G. ユング, 1977, 高橋義孝訳『無意識の心理』人文書院.)
Kahn. R. L & Antonucci 1980 “Convoys over the Life Course,” Baltes, P, B, *Life-Span Development and Behavior*, New York: Academic Press.
Kaufman, S, R, 1986, *The Ageless Self* The University of Wisconsin Press. (=カウフマン, 1988, 幾島幸子訳『エイジレス・セルフ』筑摩書房.)
株本千鶴, 2000, 「老人ホーム利用者のライフヒストリー」副田義也・樽川典子編『現代家族と家族政策』ミネルヴァ書房。
木下康仁, 1997, 『ケアと老いの祝福』勁草書房。
金子 勇, 2001, 『高齢社会とあなた』日本放送出版協会。

- , 1987, 「都市高齢者のネットワーク構造」『社会学評論』38; 32-46.
- 栗原 彬, 1986, 「『古い』とく老いる」のドラマトゥルギー」河合隼雄他編『老いの人類史』岩波書店.
- Litwak, E. and Ivan, Szelenyi, 1969, "Primary Group Structures and their Functions: Kin, Neighbors, and Friends." *American Sociological Review* 34; 263-277.
- 目黒依子, 1987, 『個人化する家族』勁草書房.
- 三沢謙一編, 1998, 『まちづくりと地域共生 学研都市調査第一次中間報告』同志社大学文学部社会学研究室
- 中村達也, 1992, 『豊かさの孤独』岩波書店.
- 那須宗一, 1962, 『老人世代論—老人福祉の理論と現状分析』芦書房.
- 大久保孝治・嶋崎尚子, 1998, 『ライフコース論』放送大学教育振興会
- 小倉康嗣, 2001, 「後期近代としての高齢化社会とくラディカル・エイジング」『社会学評論』52; 50-67
- Plath, D. W., 1980, *Long engagements: Maturity in Modern Japan* Stanford University Press. (=D. プラース, 1985, 井上俊・杉野目康子訳『日本人の生き方』岩波書店.)
- , 1986, 「米国における老年」河合隼雄他編『老いの人類史』岩波書店.
- Plummer, K., 1983, *Documents of Life*, London: Unwin Ltd. (=K. プラマー, 1991, 原田勝弘・川合隆男他訳『生活記録の社会学』光生館)
- Scott, J., 1991, *Social network analysis: A Hand book*, New York: Sage Publications.
- 副田義也, 1978, 「主体的な老年像を求めて」『現代のエスプリ』
- 他編, 1981, 『老年世代論』垣内出版
- 他編, 1981, 『老後問題論』垣内出版
- 須田木綿子, 1986, 「大都市地域における男子ひとり暮らし老人の Social Network に関する研究」『社会老年学』24; 36-51.
- シモース・ド・ボーヴォワール, 1972, 朝吹三吉訳『古い』(上・下)人文書院.
- S. リンハルト, 1986, 「日本社会と古い」河合隼雄他編『老いの人類史』岩波書店.
- 玉野和志, 1990, 「団地居住老人の社会的ネットワーク」『社会老年学』32; 29-39
- 寺澤恵美子, 1997, 「ポスト・フェミニズムの中の古い」青井和夫他編『成熟と老いの社会学』岩波書店.
- 上村くにこ, 1997, 「エイジズムまたは文明のスキャンダル」青井和夫他編『成熟と老いの社会学』岩波書店.
- 上野千鶴子, 1986, 「老人問題と老後問題の落差」河合隼雄他編『老いのパラダイム』岩波書店.